

# デヴァウラー 1巻

## ヴォイド号事件（前編）

### 【第1話】 侵入

この小惑星は直径およそ二十数キロ。  
表面には資源採掘のための簡易ステーションが設置され、ヴォイド号はそこで採掘された鉱石の回収を行っていた。

小惑星採掘ステーション外周、整備用通路。  
整備士のマヤ（24）は、外壁固定ボルトにレンチをかけたまま、小さく息を吐いた。白い密着型宇宙服のひざが金属床へ触れるたび、乾いた音が短く響く。その少し後ろでは、通信士のノゾミ（23）が端末を片手に、中継器の反応と配線番号を確認していた。

この区画には空気も重力もある。壁の向こうは宇宙だが、ここ自体はただの作業通路だった。一定間隔の照明、足元の配線カバー、点滅する監視カメラ。二人にとっては何度も経験してきた、退屈な点検作業のひとつにすぎない。

「そっち、感度どう？」

マヤが顔を上げずに言う。

「少し落ちてる。でも、まだ大丈夫」

ノゾミは端末の表示を見たまま答え、何気なく足元へ視線を落とした。

黒いものが付いている。

油のようにも見えた。だが照明を受けた表面には、機械油とは違うぬめりがあった。ノゾミはしゃがみ込み、手袋の先でそっと触れる。指を離すと、黒い粘液が細く糸を引いた。

「……何これ」

その一言で、マヤも作業の手を止めた。ノゾミは床に残る黒い筋を追う。それは照明の薄い曲がり角の奥へ消えていた。

ネチャ……

湿った音がした。

二人の動きが止まる。

音は、曲がり角の向こうからだった。

ノゾミがライトを向ける。暗がりの中で、何かがぬらりと動いた。次の瞬間、長く黒いものが滑り出る。腕ほどの太さがある。表面は粘液で濡れ、生きているみたいに脈打っていた。

「え……」

その黒いものが一気に伸びた。

ノゾミの右腕に絡みつく。ほとんど同時に、別の黒く長いものがマヤの両脚へ巻きついた。さらに一本が腰へ巻きつき、締めつけると、二人の身体を強引に引き寄せる。

レンチが床に落ち、甲高い音を立てた。

曲がり角の奥から、黒い異形がそのまま通路へ這い出してくる。

大きい……黒く大きなかたまり。三メートルはある大きな黒い何か。その何かから何本もの触手が生えていた。体表はヌメヌメした粘液に覆われ、ぬらぬらと照明を返している。目はない。顔らしい顔もない。ただ、巨大な円形の口だけがあった。そこから唾液が糸のように垂れ、暗い口内には無数の鋭い歯がびっしりと並んでいる。人間の肩幅より少し狭いぐらいの、大きなまがましい口。

声も出せないノゾミ。マヤは必死にもがいたが、触手はまったく緩まない。宇宙服が床

を擦り、乾いた音とぬめる音が重なった。

ノゾミの身体が引き寄せられる。

触手は彼女の腕と腰を固定したまま、なすすべもなく怪物の口の前へと引っ張られる。暗い口の奥から漂う生臭さと、唾液の濡れた光が目前まで迫る。

「や……っ」

ノゾミの掠れた声は、そこで途切れた。

巨大な口がさらに大きく開く。円形の口。よだれが糸を引き、暗い口内の奥には無数の鋭い歯がびっしりと並んでいる。その奥につづく暗い穴には、その鋭い歯列が何重にもあった。

理解が追いつかないまま、その気持ち悪い形状に彼女たちは生理的な嫌悪感と恐怖だけが一気に全身を駆け巡る。

そしてノゾミの身体がそのおぞましい異形の口へと運ばれていく。触手は腕と胴を拘束したまま、彼女の肩へと大きなあざとが喰らいつく！

無数のナイフで突き刺されたかのような激痛に、ノゾミの全身が強張る。次の瞬間には、彼女の肩に喰い込んだ無数の鋭い歯が口の奥へと畳まれる。

「っ……」

刺されただけでなく挟られる痛み。さらには、それにより彼女の身体は無理やり口内へ押し込まれる。

「い……ッ」

短く切れた声が漏れる。

食べようとしている。この何かは私を食べようとしている。逃げようにも無数の歯が身体に喰い込んでおり、触手によっても捕えられているため、何ともならない。大きな口がまたも大きく開かれると、喰い込んだ歯が奥へと畳まれさらに引き摺り込まれる。

そして口が閉じられると胸と背中と上腕に、またも無数の鋭い歯が突き刺さる。すぐにもう一噛み！彼女の上半身は呑み込まれた。

顔が暗い口内へ引き込まれ、粘液にまみれる。その怪物はなおもノゾミの身体を呑み込んでいく。

その怪物の口内の奥は食道。この食道は口内より狭くなっている。彼女の身体はどんどん呑み込まれ、頭部はもう食道へと達する。

胸へ進んだところで、彼女の大きな乳房が狭い食道の入口につかえた。身体が一瞬止まる。だが止まったのは、その一瞬だけだった。歯がさらに深く食い込み、強引に獲物の身体を呑み込んでいく。存在感のある大きな乳房はプニユッと潰され、圧迫された上半身が少しずつ奥へ沈んでいく。

腹。腰。まだ外に残っている脚が激しくもがく。だが、食道は容赦なく狭く、腰骨が押し潰されるような鈍い圧迫が走り、ノゾミは怪物の喉の奥でのたうち回す……動きをしようとするものの、強烈に圧迫されているので、それすらできない。

次いで両脚が引き込まれ、最後に足先が暗闇へ消える。巨大な口はそれを呑み終えると、獲物を喉の奥へ奥へと送り込むようゴキュツ、ゴキュツと音を立てながら脈動した。

ゴキュツ、ゴキュツ、と湿った音と脈打つ動きが続く。

マヤはその様子を、どうすることも出来ず見ている。恐怖にひきつり、失禁してしまう。肌にピッタリとフィットした宇宙服の中で彼女の小便が両足へとつたっていく。

次の瞬間、怪物は口をわずかに開き、何かがベツと吐き出される。ベチャッと床へと落ちたのは、粘液にまみれた白い塊。それは、白い密着型宇宙服……だったもの。今はただの破れた数枚の布切れ。ビリビリに裂け、胸元の識別タグだけがかろうじて残っている。

NOZOMI

マヤの喉から、短い息が漏れた。

「え？……ちょ、や……」

そして怪物はまたもペツと何かを吐き捨てる。ペチャツと落ちたのは、これまた唾液まみれ・胃液まみれのショーツとブラジャー。丸呑みされたノゾミは、怪物の胃の中で丸裸にされてしまったらしい……

「……や、…やめ……」

自分がこれからどうなるかを知るマヤは、恐怖のあまり失禁が止まらない。涙も流しながら顔をこわばらせる。

そして触手がマヤの身体を、怪物の口の前へと引き寄せる。マヤは触手を振りほどこうとするも、無駄なあがきだった。目の前では、巨大な口がゆっくりと広がっている。

「いや……いやあ……！」

獲物の悲鳴など気にも止めず、怪物はマヤの両足へ喰らいつく。すさまじい圧力で鋭く尖った歯は彼女の脛やふくらはぎに突き刺さる。その刃は白い宇宙服の脚部を貫き肉へ達する。マヤの喉から、言葉にならない声が漏れた。

彼女は先ほどのノゾミと同じく口の奥へと引き込まれ、膝、太腿と順に吞まれていく。大きな尻肉が口幅より大きく、引っかかる。が、怪物はさらに大きく口を開け、その大きな尻肉ごと呑み込んだ。

食道に到達したところで、またも大きな尻肉がつかえた。腰回りの幅が口と食道に対して大きすぎるのだ。それでもお構いなく、強引に呑み込んでいく。

鋭い歯は尻や股間に喰い込み、獲物を逃がさない。圧迫はさらに強くなり、マヤの身体が大きく痙攣した。

ボキッ……

腰骨のあたりで鈍く響く。マヤの目は見開かれ、全身から力が抜けたようにダランと垂れる。マヤの口からはヨダレが垂れている。

そこから先は、押し潰されるようにして腹、胸が吞まれていった。大きめの乳房が口に引っかかるも、強引に呑み込む。さらに狭い食道でも引っかかるが、それでも強引に呑み込んでいき、ただの食肉となった女体は押し潰されながら奥へ奥へと送られていく。

怪物は口を閉じる。獲物を喉の奥へ奥へと送り込むよう、ゴキュッ、ゴキュッと音を立てながら脈動だけが続いていく。

通路には、また静寂が戻った。

しばらくすると、何かがベッと吐き出される。通路の床へとベチャッと落ちたのは、粘液にまみれた白い塊。それは、白い密着型宇宙服……だったもの。今はただの破れた数枚の布切れ。ビリビリに裂け、もはや原形を留めておらず、その布切れの中には、彼女が穿いていたショーツ、つけていたブラジャーもぐちゃぐちゃになって紛れ込んでいた。

その怪物は、胃の中で獲物の身体を味わっていた。この捕食者は胃の中にも味覚があり、胃の内壁にある無数の舌のような触手で女体を舐め回すようにもみくちゃにし、消化をうながす。その過程で獲物が着ていた衣服をビリビリに破っていき、剥ぎ取っていたのだ。

そして捕食者はそれを胃から口へと戻していく。先ほどベッと吐き捨てたのがそれである。床に落ちた唾液まみれ・胃液まみれの衣服、そしてこれまた唾液まみれ・胃液まみれのショーツとブラジャー。

胃の中で丸裸にされたノゾミとマヤ。さすがにもう息はなく、胃液の中で味覚ある触手で舐め回されもみくちゃにされ、特に乳房や尻肉は執拗にぶにゅぷにゅともまれ、尻穴・性器・尿道・口など穴という穴に触手を突っ込み味わっていく。獲物の内側からも舐め回して味わい尽くす。やがて消化され吸収されていくだろう。

……美味しい……これは美味しい獲物だ……

……これはご馳走だ……

静まり返った通路の片隅で、別の小さなものが動いていた。

幼体。

黒い粘液をまとった細い身体が、床を伝う振動へ敏感に反応する。遠くで動く採掘機械の低い振動。コンテナ搬送の規則的な揺れ。大きな箱が別の場所へ運ばれていく。

幼体の一体が、ぬらりと前へ出た。

鉱石コンテナの底部。小さな隙間へ、柔らかな身体を細く変形させながら潜り込む。黒い身体は、そのまま内部へ消えた。

ヴォイド号の外部固定アームが順に解除された。船体の姿勢制御スラスターが白く噴き、小惑星採掘ステーションからゆっくりと距離を取っていく。やがて主エンジンが点火し、巨体は静かに暗い宇宙へ加速していった。

宇宙は驚くほど暗い。

星の光が点在するだけの空間を、ヴォイド号は黙って進み続けていた。密閉された船内では、もし何かが起きても逃げる場所はない。

ヴォイド号は全長三百メートルを超える大型採掘船である。長い通路と広い区画を持つ船内に対し、乗組員はわずか二十七人しかいない。この広大な船を管理するには、あまりにも少ない人数だった。

## ●乗組員リスト●

マヤ（24） 整備士  
ノゾミ（23） 通信士  
カエデ（24） 航行士  
リナ（22） 医療担当  
ユイ（21） 貨物管理  
アカネ（24） 機関士  
サヤ（23） センサー担当  
ミオ（20） 鉱物分析官

ユカ（22） 操舵補助  
ナツキ（23） 整備補助  
レイナ（21） 通信補助  
ミサキ（24） 機関補助  
アイリ（20） センサー補助  
カナ（22） 航行補助  
ユズ（21） 医療補助  
ミカ（23） 整備補助  
サクラ（24） 機関担当  
ヒナ（20） 貨物補助  
アオイ（21） 航行補助  
ミナ（20） 通信新人  
ハルカ（19） 新人整備士  
ユウナ（18） 新人通信士  
リコ（17） 新人航行士  
エマ（16） 新人センサー担当  
ナナ（15） 新人貨物係  
ミュ（14） 新人医療補助  
キヨミ（18） 居住区補助

全員若い女性。船長という役職はないが、実質的なリーダーは航行士のカエデ。

統括

カエデ（航行士）

主要担当

アカネ（機関士）

マヤ（整備士）

ノゾミ（通信士）

サヤ（センサー担当）

リナ（医療担当）

新人も多く、10代の少女たちが何人もいる。



数時間後。

宇宙採掘船ヴォイド号、中層貨物区画。

搬入されたコンテナが金属床へ固定される。作業灯の届かない底の隙間から、黒いものが静かに這い出した。全長数センチの幼体が、ぬらぬらと床を進む。

ネチャ……

その先から、人の足音が近づいてくる。

幼体は止まった。

振動を聴く。

そして、静かにその方向へ向きを変えた。